

まきどき・植えどき・収穫どき
どきどき情報

5月

野菜の作業

気象変化の激しい時期です。保温・換気・かん水に気を配りましょう！

種まき・植え付け	栽培管理のポイント
<p>播種</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ホウレンソウ ・コマツナ ・チンゲンサイ ・ダイコン ・カブ・ニンジン ・モロヘイヤ ・スイートコーン ・えだまめなど <p>植え付け</p> <ul style="list-style-type: none"> ・トマト、ナス、ピーマン、キュウリ、スイカ、オクラ、ズッキーニなどの果菜類 ・ネギ、ハクサイ、キャベツ、パセリ、セルリー、ブロッコリー、サトイモ、ナガイモ、サツマイモなど 	<p>【果菜類の定植準備と定植方法】</p> <p>【トマト】</p> <p>・トマトは、深根性の作物であるので、作土層が深く透水性が良いところで成績が良くなります。したがって畦は25～30cmの高うねとし、通気性・透水性を図り、根群をできるだけ広い範囲に増加させることが大切です。定植は、苗の第1果房の1～2花が開花している頃の苗がよく、これより若苗では栄養生長に移行し異常主茎や着果不良が発生しやすくなってしまいます。定植後、活着し芯葉が伸び始めるまでは育苗床の延長と考え、生育をみながら株元にかん水します。（*定植時に苗に十分吸水させ、定植後は水をやりすぎないことがポイントです）やむをえず若苗を定植した場合は、第1果房が着果するまでは必要最小限の土壤水分とし、できるだけ乾燥状態で管理します。</p> <p>【ナス】</p> <p>・ナスは高温性野菜であるので、ポリマルチ栽培を基本とします。定植が早い時には、トンネル被覆を併用します。地温15℃が確保できるよう早めのポリマルチを行います。トンネル被覆ではトンネル内の気温が17～35℃となるよう注意し保温や換気を行います。普通栽培での定植は、晩霜の恐れがなくなる時期に行いますが、風のない晴天日を選び、つぎ木苗ではつぎ木部が土中に埋もれないようやや浅植えとするのがポイントです。また、水分を多く必要とする野菜ですので、水分を一定に保つよう少量多回数かん水に心がけましょう。</p> <p>【きゅうり】</p> <p>・普通栽培では、地温が13℃以上で晩霜の危険がなくなる時期が定植期で5月の下旬頃からとなります。定植は、本葉3枚前後の若苗を基本とし、根鉢を崩さないように定植し、老化苗にならないよう注意します。ポリマルチの効果は、地温を高めるほか雑草防止、乾燥防止効果等もあるので便利です。また、敷わらは、高温時の地温抑制、干ばつ防止、雑草防除などの効果があり、6月が旬から7月中旬頃に行くと有効です。</p> <div data-bbox="981 981 1508 1299" style="text-align: center;"> <p>苗の植え付け</p> <p>浅すぎ 深すぎ よい</p> </div>

農薬（殺虫剤）の植え穴処理法

【使用方法と使用のポイント】

害虫防除は、基本的には発生後の広がりを防ぐ防除が主体となりますが、短期間に増殖してしまうものや一旦発生してしまうと完全防除が難しい害虫もいます。

これら難防除害虫に対応するためには、苗などと一緒に持ち込まないことや初期防除を徹底することが重要となります。このことから、例年発生が多いほ場等では、苗のチェックと周辺の雑草除去、施設栽培での防虫網の設置などの耕種的防除のほか、定植時における殺虫剤の粒剤処理が効果的です。

これには、「植穴土壌混和」や「株元散布」などの使用方法がありますので作物ごとに登録のある農薬を選定し規定量を使用します。「植穴土壌混和」処理は、植穴へ粒剤を入れ土とよく混ぜ合わせてから苗を定植し、薬害などが起こらないように注意することがポイントとなります。



農業豆知識

「新しい品目・作型に挑戦！！」

山菜の栽培（遊休農地の活用・省力品目栽培のために）

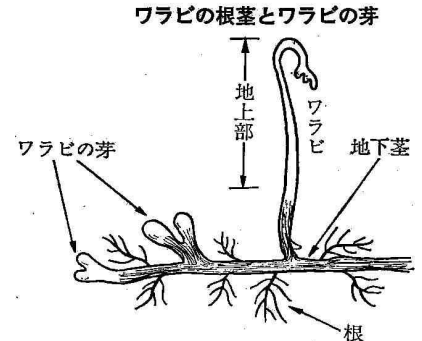
【導入にあたっての留意点】

農産物直売所らしい品目のひとつに山菜があります。導入するにあたっては、栽培技術はさることながら販売ルートや地域の嗜好動向を把握することが大切になります。販売ルートは「あさつゆ」があるのでよいのですが、嗜好性が地域により異なったり消費者が食べ方を知らないこともあり、めずらしいからといって選定するのではなく消費実態を把握したうえで、種類を選び取り組んでみましょう。

1 ワラビ

栽培形態としては、露地普通栽培、半促成栽培、促成栽培などがありますが、寒冷地などでは露地普通栽培が主体となります。栽培地は腐植が多く土壌が柔らかく日当たりのよい酸性(PH5程度)土壌が理想とされています。苗はよい系統のものを選定しますが、収量があり繁殖力の強いもの、茎が太くてできればアクが少ない系統のものを選びたいものです。植え付けは、3月中旬から4月中旬が良く、苗齢1～2年の若いもので、新芽の多い先端部分が白みを帯びて細根量が多いものを選び植え付けます。根茎は長さ20cm以上に調整し、掘り取りから植え付けまでは速やかに行き、乾かないように注意します。

植え付け間隔は、畦幅80～100cmで筋状とし、株間は根茎の活力により調整します。植え付け深さは10～15cmとし、覆土後は土となじむよう足などで軽く鎮圧し、乾燥と雑草防止のため敷き藁を行います。（萌芽期までとします。）植え付け後の管理としては、当該年は採取は行わず養成に努め、夏には雑草防除を行います。秋に茎葉が枯れたら翌春の萌芽までに焼き払うとよいでしょう。2年目から収穫が可能となりますが、除草・施肥が大切な作業となります。収穫は若芽を30～35cmくらいで折り取りますが、2年目は5月末くらいで切り上げるとよいでしょう。



2 コゴミ（クサソテツ）

コゴミは、ワラビ同様シダ植物であり繁殖には孢子による有性生殖と塊茎からのランナー伸長と子株形成による栄養生殖の2とおりがあります。栽培形態としては、露地普通栽培、促成栽培などの方法があります。栽培地の選定は肥沃で土壌が乾燥しない涼しいところが適しています。栽培にあたっては、塊茎の大きさに左右されますが、大きいものが必ずしも増収につながるとはいえず、塊茎径が4～5cmまでのものを利用し、5cm以上のものは株養成用に利用します。塊茎の採取については、生育が旺盛な自生地から採取するようにするため、秋までに場所を確認しておくといよいでしょう。採取時期は、葉、茎が枯れた晩秋から早春で、採取にあたってはランナーの先の子株も一緒に採取し、ランナーを切断しないよう、また、乾燥させないようにします。植え付けは、100～120cmの床をつくり、そこに条間40～50cm 株間20cm程度の2条植えの密植が雑草対策にもなり有利です。植え付けの深さは株の頭が出る程度にします。植え付け後は、ワラ等で被覆し、乾燥しないように注意し、かん水もこまめに行い活着に努めます。植え付け後の管理は、除草作業が主体で収穫は5月中旬までとなりますが、霜に非常に弱いので何らかの霜対策が必要です。塊茎は5cm以上になると収量が頭打ちとなるので、4～5年で植え替えることが望ましいとされています。

基礎コーナー（初心者コーナー）

～ポリマルチ栽培とは～

1 マルチの使用とメリット

ポリマルチの主な効果は地温の上昇による生育促進や乾燥の防止、土壌物理性の悪化防止、肥料の流出防止、雑草の防除（黒マルチ）などであるが、根こぶ病の発生抑制にも効果があることも認められています。マルチ時の注意点は、水分の変動が少ないので乾燥時にマルチをすると水分の供給ができず干ばつ害が起こりやすく、逆に過湿時のマルチも同様で湿害を受けやすくなるので適湿時にマルチを行うことが大切となります。

2 畝・マルチの2回使用

通常、畝立て・マルチ張りは作期毎に行いますが、寒地のレタス栽培など春作終了後すぐに後作を作付けするときなどでは、やや厚めの0.025～0.03mmのフィルムを使用し緩効性肥料を施用することで、同一フィルムで2作栽培が可能となり、品目・作型により整地・畝立て・マルチ作業の省略が可能となります。

あさつゆ連絡先 電話:FAX 41-1062

技術事項作成協力：上小農業改良普及センター
中澤普及員 (25-7156)